

「総研一期生会会報」第5号 1976年
～飯村穰所長を偲ぶ・追悼特集～

14-15頁（全文おこし）

飯村所長の追悼 白井正辰 (Nスペでは「模擬内閣」陸軍大臣 高城少佐)

飯村さんには、陸大二年間、研究所半年間お教えを受けた。したがって、その期間は、諸兄の五倍であるが、印象の深さにおいては却って諸兄に敬意を抱くほどである。それというのも、所長時代の万事が密度の濃かったことによるとともに、その後の三十年の、所長のかつての教え子に対する変わらない戀情によるものだと思う。

3月4日、私が理事長をしている偕行社において、葬儀のお手伝いができたことがせめでも恩報じとなってしまったのは痛恨にたえない。

当日の葬儀委員長(ご同期の菅原道大中将)の弔詞のうち、研究所に関係のあるところを、お伝えする。

昭和15年9月、近代戦争の研究ならびに教育を目的とした総理大臣直轄の機関として総力戦研究所の官制が公布された。

そのころの辰巳大佐(注現偕行社会長)が強力な推進役となったのは、偏えに、同大佐が駐英大使館付武官当時、深く学んだ英國の王立戦争研究所を範としたものであったからである。

優秀な所員が集められた上、研究生として各省から、将来大臣・次官となるべき逸材が簡拔された。

かかる研究所の初代所長に衆論一致して関東軍 参謀長であった君が選抜されたのは、正に、君の真面目を語るものである。

16年の夏、君は日米戦争机上演習を発意して總裁した。

現偕行社理事長である白井少佐の陸軍大臣を始め演習内閣が作られた。講評は8月下旬首相官邸で近衛首相以下、政府・統帥部関係者多数列席の下に行なわれたが、その推移は、やがて展開された大東亜戦争の終始そのままであった。

これらは「日米戦うべからず」を警告せんとしたもので、君の卓見を示すものである。

しかも、君が戦後、なお兵術研鑽の志を続けて熄まなかつたのは、戦争は国の大事であり、それ故に「国防は心なり」を唱え、その原理を広く国家中枢の士に弁えて欲しいとの情熱によるものであった。

故飯村所長を偲んで 玉置敬三

僕は人間としての飯村さんに今なお深い感銘を受けている。書棚にある数々の著書は多くを語り、あの高邁な人格を偲せてくれている。

(付) お孫さん(山口君の御長男)が東芝で元気に活躍されている。

故飯村穰前所長を偲んで 武市義雄

飯村前所長は、いい声をしておられた。あの美声で、謡でもやられたら、さぞかしだったろうと追慕申し上げる。

僕輩は総研を終えて海軍省に帰任し、程なく、僕は人間としての飯村さんに今なお深い感銘を朝鮮京城武官府補佐官に補せられ、京城で約一ヶ年間勤務し、時の小磯總督のご愛顧を得たことがある。小磯總督は時たま官邸に陸海軍の武官連をよび、小宴を催されて僕輩も幾度か、總督の小唄の美声を聴かされたので、飯村前所長の美声を、憶い併せたのである。

飯村前所長は、「武人たると共に秀れた哲人であった。」と畏敬の心情をもってお慕いする。

ある時閣下は、『中今』という語を黒板に書き懇々と、「過去と未来の接点としての『今』という時を、如何に過すべきか」という趣旨の訓話を試みられたことがある。同期生の諸賢も、ご記憶(つづく)

#